様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００８６５

研究課題名（和文）筆記ランゲージングの成立条件ー学習者内外の要因の影響ー

研究課題名（英文）Written languaging and factors that affect its learning benefits

研究代表者
石川　正子（Ishikawa, Masako）

城西大学・語学教育センター・教授

研究者番号：１０５５２９６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究１・２年目は、「筆記ランゲージング」（学習者が言語について疑問や問題に思ったことを書く活動）の長期的な学習効果を解明することを目的とした。その結果、筆記ランゲージングの効果は文法項目の難易度に影響を受けることが示された。本研究３・４年目には、ランゲージングを学習者自身にするか、他者に向かってするかが、学習効果に影響を与える可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで筆記ランゲージングを実際の教室に長期的に取り入れた実践研究はほとんど行われてこなかった。ゆえに、本研究は筆記ランゲージングを取り入れた教育実践方法の理解に貢献することとなった。また、筆記ランゲージングの効果は、文法項目の種類やランゲージングを行う対象によって、影響を受ける可能性が示唆された。これらのことを念頭に入れて、筆記ランゲージングの実践に当たる必要がある。

研究成果の概要（英文）：The first and second years of this study attempted to identify the long-term learning effects of "written languaging" (an activity in which learners write about questions or problems they have with the language). The results indicated that the effects of written languaging might be influenced by the difficulty level of the grammar items. In the third and fourth years of this study, it was suggested that whether the languaging was done to the learners themselves or toward others may affect the learning effect.

研究分野：外国語教育

キーワード：ランゲージング　外国語教育　アウトプット　振り返り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「ランゲージング(languaging)」とは外国語（第二言語）学習者が課題に取り組む中で疑問や問題に思ったことや自らの言語使用を振り返る際に、それらについて話す、または、書いて理解を深める学習プロセスで、その学習効果が明らかになりつつある（Suzuki & Storch, 2020）。口頭・筆記ランゲージングともに言語学習を促進する効果があるが（Suzuki, 2012; Swain, 2006）、初期のランゲージング研究の多くは学習者が話し合うなどの口頭ランゲージングに関するものであった (例えば Swain & Lapkin, 1998, 2002)。そのような状況の中、本研究代表者と分担者は筆記ランゲージングの研究に着手し、その学習促進効果を明らかにしてきた（Ishikawa, 2013; Ishikawa & Suzuki, 2016; Suzuki, 2012）。しかし、これまでのランゲージング研究は短期間の実験室的なものがほとんどで、実際の教室で長期的に授業に取り入れて学習促進効果を検証したものはほぼ皆無であった。また、口頭・筆記ともにランゲージングの量と質が学びと関連していることが報告されているが(例えば Ishikawa & Révész, 2020; Swain, Lapkin, Knouzi, Suzuki, & Brooks, 2009)、どうすれば質の高いランゲージングをより多く引き出せるのかについては、不明なままであった。

２．研究の目的

上記の背景から、本研究では筆記ランゲージングの長期的教室実践による学習促進効果、筆記ランゲージングと学習者外要因（教員の指示）の関連を検証して、研究成果を発展させ広く一般化することを目指し以下の研究課題に取り組んだ。
①筆記ランゲージングを長期的に教室実践した場合、どのような効果があるのか？
②教員の指示は、筆記ランゲージングの学習効果にどのような影響があるのか？

３．研究の方法

筆記ランゲージングの長期的効果を検証する教室実践を 1 年目にはオンライン授業、2 年目には対面授業で計 2 回行った。また、教員の指示が筆記ランゲージング効果にどのような影響を与えるのか 3 年目に本試、4 年目には追試と計 2 回の実験で検証した。それぞれの概要と結果は以下の通りである。

（１）実践 1 と 2

①参加者

本研究の 2 回の実践には、私立大学で 1 つの英語必修クラスに在籍していた 1 年生が参加した（初回 25 名、2 回目 28 名）。参加者は名簿の前半と後半で 2 群に分けられ、隔週で筆記ランゲージング又は英文和訳を行った。

②実践方法

2 回の実践は文法中心の授業使用テキストを用いて 10 週間にわたって行われた。1 年目はコロナ禍での zoom によるオンライン授業、2 年目は対面授業であった。毎授業初めにその日学習するユニットの文法項目の事前テストを行い、通常の授業実施後、その日学んだことについて参加者が毎週交互に筆記ランゲージング又は英文和訳に取り組み、授業の最後に事後テストを実施した。事前・事後テスト、筆記ランゲージング、英文和訳は Microsoft 社 Forms を用いて実施された。

③分析方法

事前・事後テストはその日学習する文法項目についての選択式文法問題 8 問で構成された認識テストで（8 点満点）、その結果を分析した。一方、ランゲージングの分析方法は、初めに筆記ランゲージングに含むべきポイントを全ユニットで数え（筆記ランゲージングされるべき総数）、その総数で参加者が実際に行ったランゲージング数（参加者全体の筆記ランゲージング総数）を割った筆記ランゲージング率を算出した。

④結果

授業形式に違いはあるものの、2 度の実践ではほぼ同様の結果を得た。主なものとして、全ての週で事前事後テスト間に伸びがあったが、筆記ランゲージングを行った週と行わない週（英文和訳時）の伸長度には違いがほとんど見られなかった。また、筆記ランゲージングを行っ

た週ごとの伸びの間にも差が見られた。これらの結果は筆記ランゲージングが英文和訳と同程度の学習効果があることを意味しているが、選択式 8 問のみの事前事後テストだけでは筆記ランゲージングによる学びを計るには不十分であったかもしれない。また、筆記ランゲージング率を調べたところ、伸びの度合いは文法項目によって差があることが分かった。例えば初回の実践では、現在完了形、助動詞、名詞・冠詞は 2 点以上の伸びを見せた一方、現在形、過去形、関連詞など 1 点に満たない項目もあった。また、名詞・冠詞のように筆記ランゲージング率が低くても事前事後テスト間の伸長度が大きい項目がある反面（2.31 点, 34%）、過去形のように筆記ランゲージング率は高いもののテストの伸びにつながっていない項目もあった（0 点, 44%）。先行研究では、より豊かなランゲージングを行うほど、より大きな学びにつながるという両者の相関が報告されているが (Ishikawa & Révész, 2020)、ここでの結果はそれらと必ずしも一致しないものとなった。これには項目による説明のしやすさ・しにくさ、既有知識などが影響しているかもしれない。

（2）実験 1 と 2（本試・追試）

①参加者

本試・追試とも私立大学で必修の一般英語を受講する 1 年生が参加した。事前テストの結果により、自分自身に向けて書いて説明する自己群、同級生に説明する他者群に振り分けられた。全ての工程に参加できなかった、又は事前テストで 8 割以上得点した参加者を除外した。その結果、本試は自己群 10 名、他者群 13 名の計 23 名、1 年後に実施された追試は両群 17 名ずつの計 34 名がデータ分析対象となった。

②実験方法

実験は 3 週間にわたり、本試・追試とも同じデザインで行われた。第 1 週目は事前テストを実施した。第 2 週目には、冠詞を目標言語項目とする英作文の添削を受けた個所について、どうして間違っているのかなどを書いて説明するよう求めた（筆記ランゲージング）。その際、自己群は自身の作文が添削を受け、他者群は架空の同級生が受けた添削についての説明を頼まれたという設定で行った。その後、直後テストを実施した。第 3 週目には、遅延テストとアンケートを行った。各テストは英作文型と多肢選択型で構成された。

③分析方法

英作文テストは、与えられた語を使って 5 コマの絵を英語で描写するものである。分析では正しく使われている冠詞の数を冠詞が必要なコンテクストの数で割り正解率を計算した。多肢選択テストは、4 コマの絵を見ながら、それぞれを説明する文中の適切な語、又不要ならば X を選ぶものである。20 問中、冠詞に関する 15 問のみを採点対象とした（各 1 点×15 問で 15 点満点）。全テスト採点後、自己群・他者群の英作文型・多肢選択型それぞれの事前テスト・直後テスト・遅延テストの結果を比較した。3 週目に実施したアンケートでは、添削について説明したこと、又、自分と他人に説明するのでは違いがあると思うかなど、参加者の考えについて情報を集めた。

④結果

表 1 は本試と追試の自己群・他者群の英作文課題・多肢選択課題の事前・事後・遅延テスト結果である。本試・追試とも両群の事前テスト結果には両課題、有意な差は見られなかった（n.s.）。両群の学び（テスト結果）を比較するため、各課題の直後・遅延テスト結果について *t* 検定を行ったところ、本試では英作文課題の直後テストのみに自己群と他者群の間に有意な差が見られた（$t(21) = -2.94$, $p = .008$）。一方、追試では有意な差が見られなかった（n.s.）。

表 1：事前・事後・遅延テストの記述統計結果

		事前				直後				遅延			
	群	英作文		多肢選択		英作文		多肢選択		英作文		多肢選択	
		Ave	*SD*	*Ave*	*SD*	*Ave*	*SD*	*Ave*	*SD*	*Ave*	*SD*	*Ave*	*SD*
本試	自己	0.17	0.16	7.95	1.73	0.42	0.26	9.75	4.38	0.49	0.33	11.45	2.65
	他者	0.14	0.12	8.23	2.05	0.72	0.22	12.00	3.44	0.59	0.18	11.38	2.23
追試	自己	0.16	0.16	7.35	2.42	0.48	0.25	9.94	2.78	0.35	0.24	9.09	3.18
	他者	0.12	0.14	7.59	1.77	0.40	0.20	9.89	2.65	0.33	0.21	8.68	2.65

上述のように追試では差が無かったものの、本試では一部のテストで自分よりも他者に向けて説明をした方がランゲージングの学習効果が高いという結果を得た。これは、筆記ランゲージングをする対象がその学習効果に影響を与えうること、具体的には他者に向けて筆記ランゲージングを行った方が、自身に向けて行うより、効果が高いことを示唆している。この結果を裏打ちするように、アンケートでは参加者ほぼ全員（23 人中 22 人）が自分と他者に説明するのでは違いがあると思うと回答し、更にその多くが自分より他者に向けた方がより分かりやすく説明しようと努めると回答している。（追試でも、本試同様アンケートには 34 人中 32 人と、ほぼ全ての参加者が説明する対象による違いはあると回答した。）

４．研究成果

本研究では、これまで口頭・筆記ともにほとんど研究されていないランゲージングの長期的教室実践による効果の検証、および、ランゲージング効果と学習者外要因の一つである教員の指示との関連を解明することを試みた。長期実践では、筆記ランゲージングと英文和訳の間に大きな差は見られなかったが、文法項目の種類によって、筆記ランゲージングの効果が異なる可能性が示唆された。また、ランゲージングの学習効果はその量・質と関連すると考えられるが（Ishikawa & Révész, 2020）、いくつかの文法項目ではランゲージングと学びに必ずしも関連が無かったことを考えると、筆記ランゲージングの学習効果と文法項目の難易度はもちろん、ランゲージングのしやすさ・しにくさ、既有知識との関連など、更に解明すべき課題も浮上した。ここでの結果の実践的意義は、筆記ランゲージングを授業で効果的に実践するために、教師がどの言語項目をランゲージングの対象とするのかを見極める必要があるということである。

上述のように先行研究ではランゲージングの量と質が、その学習効果と関連していることが示されており（Ishikawa & Révész, 2020）、本研究ではより多く質の高いランゲージングを引き出す手立てとして教員の指示に着目し学習効果との関連を探った。その結果、ランゲージングをする対象（相手）によって、その効果が変わりうるという可能性が示唆された。今後更なる検証が必要ではあるが、この結果はランゲージングの指示の出し方の重要性を示すものであり、教師がランゲージングを授業に取り入れ、その場にあった指示を出して有効な活動につなげうることを意味している。また、これまで筆記ランゲージングの学習効果と適性や習熟度など学習者内要因との関連に関する研究は行われているが（Ishikawa, 2018; Ishikawa & Suzuki, 2023）、本研究は学習者外要因との関連を探る初めてのものとなり、英語教育・第二言語習得研究に貢献することとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木渉・石川正子	４．巻 72(11)
２．論文標題 ことばへの気付きをもたらすランゲージング―主体的・対話的で深い学びへつなげるために	５．発行年 2024年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ishikawa, M. & Suzuki, W.	４．巻 107-S1
２．論文標題 Effects of WrittenLanguaging on Second Language Learning: Mediating Roles of Aptitude	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Modern Language Journal	６．最初と最後の頁 95-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石川正子・鈴木渉	４．巻 14
２．論文標題 筆記ランゲージングを取り入れた教室実践の試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 城西大学語学教育センター研究年報	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤 玲・鈴木 渉	４．巻 42
２．論文標題 第二言語ライティングにおける書記訂正フィードバックとその振り返り，書き直しに関する態度と行動：認知モデルの提案と予備的調査の報告	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東北英語教育学会紀要	６．最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Masako Ishikawa・Wataru Suzuki
２．発表標題 Effects of written languaging on second language learning: Mediating roles of aptitude
３．学会等名 The American Association of Applied Linguistics, Portland, USA（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石川正子・鈴木渉
２．発表標題 筆記ランゲージングを取り入れた教室実践の試み
３．学会等名 第46回全国英語教育学会長野研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Wataru Suzuki
２．発表標題 Languaging in second language learning and teaching: Theory and research
３．学会等名 Swansea University（Wales, UK）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木渉
２．発表標題 Languaging in language learning and teaching
３．学会等名 言語教育エキスポ2020　オンライン
４．発表年 2020年

１．発表者名 Suzuki, W.
２．発表標題 Languaging: Theory, research, and pedagogy
３．学会等名 Invited Plenary at JSLARF annual meeting. Online.（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Suzuki, W., and Storch, N.
２．発表標題 Languaging in different L2 instructional contexts
３．学会等名 Colloquium to be presented at the annual conference of American Association of Applied Linguistics. Online.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木渉
２．発表標題 主体的で深い学びを実現するための英語学習法・指導法―ランゲージングの理論と実践―
３．学会等名 小学校英語教育学会（JES）秋田支部セミナー
４．発表年 2021年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Suzuki, W., Ishikawa, M., & Storch, N.	４．発行年 2023年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 18
３．書名 Verbally mediated data: Written verbalizations.	

1．著者名 Ishikawa, M. & Revesz, A.	4．発行年 2024年
2．出版社 John Benjamins	5．総ページ数 21
3．書名 Written Languaging, Learners’ Aptitude, and L2 Learning through Dictogloss Tasks	

1．著者名 Swain, M., & Suzuki, W.	4．発行年 2024年
2．出版社 John Wiley & Sons	5．総ページ数 14
3．書名 Interaction, languaging, and communicative language learning	

1．著者名 Suzuki, W., and Storch, N.	4．発行年 2020年
2．出版社 John Benjamins	5．総ページ数 330
3．書名 Languaging in language learning and teaching: A collection of empirical studies.	

1．著者名 Suzuki, W., and Storch, N.	4．発行年 2020年
2．出版社 John Benjamins	5．総ページ数 15
3．書名 Introduction	

１．著者名 Ishikawa, M. and Revesz, A.	４．発行年 2020年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 21
３．書名 L2 learning and the frequency and quality of written languaging	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　渉 (Suzuki Wataru) (60549640)	宮城教育大学・教育学部・教授 (11302)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関